

第 44 回関東甲信地区医学検査学会

風林火山…

新しい検査技術への挑戦

昨年 11 月 10、11 日の両日、長野県軽井沢町において第 44 回関東甲信地区医学検査学会が開催されました。今年の長野県は、NHK 大河ドラマ風林火山がブームとなっています。

学会事務局がある小諸市でも、武田氏侵攻の跡と言いつゆの残る城址は、観光客で賑わいを見せています。小諸城は高遠城(伊那)、海津城(松代)とともに山本勘助が縄張りにした城として伝えられています。場内には山本勘助が愛用したとされる鏡石が今も残されています。

開催地の軽井沢はここから東に 20 km、上州へ通ずる要所となっていたようですが、今は高級別荘やショッピングセンターが立ち並ぶ国際的リゾート地として、多くの方が訪れます。夏場の人口は 10 倍(10 万人)になるといわれています。なんとといっても真夏の朝晩のさわやかさは最高です。長野オリンピック開催に合わせた新幹線の開通により、首都圏から 1 時間余りで足を運ぶことができるようになったのも増加につながっています。

会期中は冷雨降りしきる中にもかかわらず、参加者 1,120 名と、会場内は熱気であふれました。公開講演は、自然豊かな信州にゆかりの深い、C. W. ニコル氏にお願いしました。黒姫在住のニコル氏は色鮮やかな画像をふんだんに使い、木や森と他の生物のかかわりを明快に示していただきました。そして私達が求める里山は自然放置するものではなく、ヒトが手を入れて作るものだということが分かりました。メインテーマ「新しい検査技術への挑戦」は、信州大学が誇る再生医療について、各研究班が取り組んだ 6 シンポジウムにも、これから検査技師がかかわる技術を学ぶことができました。機器展示や[ma]によるミニコンサートも好評でした。



一方、医療の技術革新が進む中、長野県の各病院では深刻な医師不足に陥っています。中身は周産期のみならず麻酔科や外科などにも及んでいます。このままだと地域医療が崩壊するとまで言われています。このような社会背景のもとに特別企画の運営改善セミナーでは、「変革する医療にいかにか立ち向かうか」をテーマに、選ばれる病院づくり、チーム医療、経営戦略など貴重な発表していただきました。3 施設からの発表は大きなヒントとなりましたが、それぞれの施設で出口が見つかったわけではありません。新たな職域の確保など、熱い討論は来年の開催地、信玄の甲斐に引継ぎたいと願っています。

【池田昌伸】

地区学会便り

《臨検小話》



エムティー法務研究会 新屋 博明

検査業務をしながらノート(備忘録)に書き留めておいた小話を紹介したいと思います。

① 蟯虫の「曉」について

この虫の特徴は、皆様ご存知の通り、雌が明け方(曉)に肛門から這い出して、肛門の周囲に卵を産むことです。明け方(曉)に出てくる虫なので「曉虫」と表記すべきかもしれませんが¹⁾、「曉」ではなくムシ偏の「蟯」という漢字を当てたのは、まさに“ネーミングの妙”という感じが致します。

ちなみに漢和辞典の漢語林によりますと、「蟯」には「しなやか」という意味があり、「虫+堯=蟯」で「人の腹に寄生する、しなやかな虫」の意味を表しているそうです²⁾。

② 日本住血吸虫は、なぜ「日本」なのか?

日本住血吸虫症は、広島県片山地方で最初に発見されたので、当初は片山病と呼ばれていたそうです。当時は原因が不明だったので、便宜的に発見された土地の名で呼んでいたのでしょうか。

片山病の原因が寄生虫(住血吸虫)であることを突き止めたのは、岡山医専(現在の岡山大学医学部)病理学の桂田富士郎教授で、それは 1904 年(明治 37 年)のことでした。このように日本人が発見したので、日本住血吸虫と命名されました³⁾。

ちなみに、ビルハルツ住血吸虫はドイツ人のビルハルツによって、マンソン住血吸虫はイギリス人のマンソンによって発見されたので、それぞれ発見者の名前を冠しています⁴⁾。

私は、桂田富士郎教授の御名前「桂田」ではなく、国名の「日本」を冠した「日本住血吸虫」に、明治期の学者の心意気を感じております。

③ グッド緩衝液は、なぜ「グッド」なのか?

私は、優れた緩衝液なのでグッド緩衝液だと思い込んでいたのですが、正しくは、Good 先生らによって考案されたのでグッド緩衝液というそうです。それを知らなかった私は・・・赤面の至りです。

■ 文献

- 1) 名和行文: 寄生虫感染の Q&A, 90, ミネルヴァ書房, 京都, 2003
- 2) 鎌田正, 米山寅太郎: 漢語林, 970, 大修館書店, 東京, 1996
- 3) 林正高: 寄生虫との百年戦争, 57, 毎日新聞社, 2000
- 4) 林正高: 寄生虫との百年戦争, 57, 毎日新聞社, 2000

原稿募集!

いつでも“会報 JAMT”の原稿を受け付けています。検査室情報、論説、主張・・・等など! 原稿は“いきなりメール”でも OK です。

送付先: kaiho-jamt@jamt.or.jp